

●日没時に網上げ捕獲

一ツ瀬川が三財川と合流する佐土原町の西部に巨田(こた)神社がある。本殿は文安五(一四四八)年の修造と棟札にあり、「三間社流造り」の建築様式で、国の重要文化財に指定されている。神社の秋の例祭が近づき、町無形民俗文化財・巨田神楽の笛や太鼓の音を聞くと、心が弾む人たちがいる。鴨越保存会(中武四郎会長)の二十八人のメンバー。職業は農業、会社員、元公務員などで、二十歳代から八十歳代までと幅広い。

神社のすぐ東にカモの飛来地として知られる約十畝の巨田池がある。以前はここに多いときで一万羽を超えるカモが飛来していたという。今は毎年二、三千羽。秋になるとマガモ、カルガモなどが翌年の春まで約五カ月間、ここをねぐらにし、日没を待って餌を求めて飛び立つ。

鴨越保存会は昔から巨田地区に伝わるカモ猟

を引き継ぐグループ。猟の舞台は巨田池の周囲。ここでシーズン中、会員とカモの攻防が繰り広げられる。

狩猟までには準備がいる。まず、取り組むのがカモを迎え撃つ土俵作り。カモの通り道をつくるためのもので、越え普請といって三、四人が一組になって、会員がかがんだときの目の高さや草やぶを刈りそろえる。ここを坪(つぼ)と言い、場所のよしあしがあるのでくじで決める。

カモを捕らえる網を「アザオ」と言い、町の有形民俗文化財。製作は個人で行うが、改良は禁止されていて、一人三丁までの制限がある。準備が整うと、猟の安全を神社に祈願、カモ供養を行う。

いよいよ猟の開始。それぞれにくじで割り当てられた坪に入り、日没時の出カモを待つ。猟法はカモが通り道から飛び立つときを狙って、



伝統のカモ猟。「坪」に座って出カモを待つ

幅約二^{メートル}、長さ約二・五^{メートル}のアザオを五、六^{メートル}の高さに投げ上げ、捕まえるというもの。

この猟法は、宮崎城の上井覚兼日記(天正十四年・一五八六)によると、関ヶ原の戦い以前の島津家久・豊久のころから行われていたらしい。単衣(ひとえ)に素足の青年藩士が心身の鍛錬を兼ねて猟に当たったという。当時は殿様や参勤交代の献上物として重宝がられた。今は期間中、捕獲は一人平均で七、八羽。ネギ、大根を添えての鍋物がうまい。

猟期は十一月十五日から三カ月間。この間、鴨越保存会のメンバーにとって日暮れは待ち遠しい。時代は変わっても夕日を背に、じつと巨田池を見つめる姿は変わらない。

赤木達也